

（若狭地域の仏像①）

若狭地域の仏像

概要

若狭地方には、大都市ではない地域としては、貴重な仏像が数多くあります。その多くは、かつての首都であった奈良や京都で制作された質の高い作品で、重要文化財に指定されています。そのような仏像の存在は、若狭への仏教の早期の広がり、昔の首都に比較的に近かったこと、小浜港の交易によって生み出された富、そしてこの地域が内線の被害から大部分が免れたという事実などの、いくつかの要因に起因する可能性があります。いくつかの仏像は若狭歴史博物館に保管されていますが、ほとんどは何世紀にもわたって崇拝されてきた同じ寺院に残っています。

もっと詳しく知る

若狭への仏教の伝播

仏教は 6 世紀にアジア大陸から日本に伝わった後、都に受け入れられ、寺院の建立を通して促進されました。このことは、741 年に出された勅令によって促進され、それぞれの国で国営の寺院（こくぶんじ 国分寺）を設立することが義務付けられました。若狭国では 807 年にこくぶんじ 国分寺が建立されました。

特定の仏像や寺院の年代から判断すると、他のいくつかの地域に比べて、仏教はより早く若狭に伝わったと思われます。この原因の一部は、修行のためにそこを旅した僧侶の数にあります。若狭の山々は、文化的、政治的な中心から離れていると感じられるほど十分に首都から遠いですが、必要であれば簡単に戻ることができるほど近いため、そのような修行によく選ばれていたであろうと伝えられています。早くから仏教に触れていたことは、この地域の人々に普及している信仰への深い関心の一因となりました。

代々の彫像術

若狭最古と考えられている仏像は、7 世紀後半から 8 世紀前半頃の間に作られました。その仏像は慈悲の菩薩である観音を十一の頭がある姿で表しています。仏像の年代測定には、純粋な科学的方法に加えて、技術的な技能を分析し、特定の歴史的時期に典型的な視覚的特徴を特定することが含まれます。壁沿いの展示ボードには、観音像を使って、異なる時代に制作された作品の違いを示しています。

飛鳥時代から奈良時代（552 年～794 年）：6 世紀から 8 世紀の初期の仏像は、より様式化された顔立ちと神秘的で精神的な表情が彫られています。それらは通常、木または金銅でできていました。

平安時代（794 年～1185 年）：9 世紀と 10 世紀には、木製の仏像がより多く作られるようになった可能性があります。^{いちぼくづくり}一木造と呼ばれる技術で、一本の木から像の全体が彫られました。大きな木の幹を使用することと合わせて、この技法により、はるかに大きく背の高い像を作ることができました。この時代の作はより壮大で印象的になり、より厳しい顔の表情と重いひだのある衣服を備えていました。

11 世紀と 12 世紀の仏像は、より穏やかで温かい表情、丸い顔、軽やかでひだのある服を着たほっそりした体の特徴です。^{よせぎづくり}寄木造（木のブロックを結合する）技術は、より細かい作業を行うため、像のパーツを別々に彫り、その後に組み上げるもので、この時代に導入され普及しました。

鎌倉時代（1185 年～1333 年）：13 世紀には、仏像の彫刻スタイルは、顔、体、衣服のより現実的な描写へと移行し始めました。仏像はより決然とした表情とある程度の緊張感のある造形に仕上げられました。寺院内の暗い照明に映える水晶の目を入れる、^{ぎよくがん}玉眼（文字通りには、宝石の目）技法が流行しました。

交易の時代に繁栄する寺院

12 世紀から 17 世紀初頭にかけて発生した戦により、日本中の多くの宗教施設や貴重な寺宝が破壊されました。いくつかの紛争は若狭でも起こりましたが、他の多くの地方に損害を与えた大規模な戦闘からは免れました。火事で失われた木造の寺院や彫像は他地域より少なく、残された寺院の記録は、現代の研究者にとって非常に貴重であることが証明されました。

この地域に高品質の仏像があるもう 1 つの要因は、何世紀にもわたって繁栄した港町であった小浜での交易が盛んなことでした。特にこの町が栄えたのは江戸時代（1603 年～1867 年）で、この時代には、朝廷や小浜藩を治めた酒井家、豪商が宗教施設を支援しました。これにより、寺院は京都の熟練した職人によって作られた貴重な像を入手する手段を獲得しました。

反仏運動からの保護

1000 年以上にわたり、仏教と神道は融合して実践されてきましたが、1868 年に明治政府は 2 つの宗教を分離する命令を出しました。これは反仏教の感情の波を引き起こし、多くの寺院や彫像、その他の芸術作品が失われました。しかし、現在の若狭には、神道の神々の像を安置する寺院や、損壊から救うために他の場所から移されたと思われる仏像を有する寺院があります。この地域の人々の深い信仰が、そうでなければ破壊されたであろう多くの寺宝を保存するのに役立ちました。